

環友 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
環瑠集	15
瑪瑠集	28
紅玉集	30
俳誌交歓	31
10月号月評	32
恵贈句集拝見 (65)	34
(66)	36
恵贈俳誌拝見 (33)	38
特別作品「紀伊の春」	40
琥珀集作品鑑賞	42
環瑠集作品鑑賞Ⅰ	43
環瑠集作品鑑賞Ⅱ	44
瑪瑠集紅玉集作品鑑賞	45
他誌転載	48
娘の国父の蒼天 (56)	50
JR琵琶湖一周吟行	52
ひこばえ通信 (24)	54
エッセイ「二上山」	55
「長火鉢」	56

今月の一句

柿たわわ裏木戸出れば聚楽町
桂樟蹊子

(昭和六十二年作)

自給自足の武家のたしなみそのままに、武家の血を引かれた桂家では庭に夏蜜柑や梅などを庭で育てられていた。柿の木もあり、たわわに成った柿を収穫されると、冷凍庫にはお正月ごろまで柿のシヤーベットがあるとと言う話を懐かしく思い出した句である。

隆子

目高盛り

塩路隆子

のつけから水合戦には加はず
さいなむがごとく目深に夏帽子
塩壺に塩を足しをり夜の秋
ひとり居の寢屋に闖入大やもり
全快の夫や涼しき長寿眉
水足して目高盛りを喜ばす
貧相な茄子が育ちぬプランター

十月号光耀抄

塩路 隆子選

遠き日の日がな日直百日紅
窓洩るる信濃追分夜の秋
午後三時雷ぐせのつきし峡
予報士が酷暑を詫びる正午かな
いつまでを新婚といふ蔓荔枝
金盃冷やし西瓜の浮き沈み
あかときの森の定刻蝉時雨
日焼子のすらりと育ちコーラ呑む
わがために虹鱒の苞古稀の夫
蝉しぐれ初の逢瀬の亡夫若き
ぽんと咲く社の紋の桔梗かな
雲海を従へし威や駒ヶ岳
忌に戻る故郷の駅盆の唄
浜木綿の砂浜今はひと気なく
沿道の北山杉の涼意かな
甲虫の寄り来る窓辺丸太小屋
仲見世の賑はひ鬼灯市へ列

山口キミコ
藤見佳楠子
松岡 和子
宮崎左智子
常田 希望
石川かおり
伊東 和子
鈴木 照子
竹内 悦子
橋本 靖子
秦 和子
福本すみ子
西田 史郎
増田 一代
松田 和子
宮田 香
森下 康子

鉾町のしつらへみごと京町屋
 ここ礼文海霧に濡れつつ山路かな
 笛腰にいなせ男の鉾浴衣
 語らひにほどよき光夏の月
 刻々の日影風影大青田
 白シャツの腕褐色に兎の拳
 西陣や織屋の奥の湧き清水
 負けん気を捨てて静かに夏の星
 揚花火弾けて天を敲きけり
 天守より南国の街夏景色
 ビアホールその日のことを精算し
 菜箸に長短出来て焼茄子
 ややこしき話はあとに心太
 菩提樹の花見上げある女人かな
 信濃旅地産地消の夏料理
 向日葵に触れて力を貰ひけり
 スペインの風を土産に朱の扇
 白置けば黒黒置けば白秋の夜
 消印が価値白樺の夏見舞
 蚊の来襲闇を零戦飛ぶ如く

飯田美千子
 伊藤純子
 伊藤憲子
 大島みよし
 小澤菜美
 笠井清佑
 片岡久美子
 川崎利子
 坂上香菜
 坂根宏子
 笹井康夫
 佐用圭子
 塩路五郎
 杉本綾
 田中浅子
 辻香秀
 辻知代子
 常田創
 北尾章郎
 山本孝夫

球審を買って出でたり生身魂
 古町の越中八尾夏格子
 日の昇るまでを一気に草むしり
 滅却の修業の足りず熱帯夜
 戦時の書読みて八月空青き
 大甕を住処に布袋草咲けり
 大西日杜の向かうに來迎
 舷を叩き鶉の意気高めたる
 左金剛街道筋の凌霄花
 空蟬や余生ぐらゐは力抜け
 夏潮の潜水艦をまのあたり
 昼顔に頬近づけて波を聞く
 終戦忌兵を送りし日の記憶
 日盛りの低空飛行からす二羽
 太平の舞大らかに鉦の稚児
 散策の先を急かすや蟬の声
 粥すする暁天講座涼風に
 せせらぎや老舗の饗に螢の火
 あぢさゐの一輪活けて無人駅
 ユニークな五百羅漢に藪蚊寄る

阪本 哲弘
 藤本 秀機
 松田 洋子
 高谷 栄一
 西岡 裕子
 和田 森早苗
 谷口 俊郎
 国包 澄子
 中村 ふく子
 吉田 宏之
 井口 淳子
 中川 すみ子
 能勢 栄子
 三川 美代子
 人見 洋子
 平井 紀夫
 宮越 久子
 山内 節子
 山内 夕力子
 山崎 里美

幽霊飴買うて六道詣かな
縄がらみ次代につたへ鉾立てる

初蟬と曆に記し厨事

取り皿にらつきょう五粒昼ひとり

鉾立の化粧縄巻く匠技

お駄賃に李貰ひぬ媼づれ

梅雨明や注連を張りたる那智の滝

ゆづり合へばことなきものを振り花

包丁を借りて断ちたる大西瓜

掌に受くる神泉木下闇

千年を経たる城壁夏日影

「反原発」のシュプレヒコール蟬時雨

金魚玉小さき自由たのしめる

夏灼くる砂利道行きて法隆寺

夏の風希望持てない野党殿

風鈴にエコのくらしを伺ひぬ

麻の服心地よく着て女優顔

熊野路の起点碑街の緑蔭に

星涼し「銀河鉄道の夜」を読む

銀鱗の敏捷を追ふ箱眼鏡

宿坊の創作料理はやも秋

山田 愛子

横田 矩子

粟倉 昌子

板倉 安正

伊藤 和子

伊庭 玲子

大谷 信子

大松 一枝

落合 晃

桂 敦子

木戸 宏子

小林 久子

西郷 慶子

鈴木 江奈

鷺見たえ子

田中 久子

十時 和子

中井 登喜子

中井 弘一

中本 吉信

和田 郁子

琥珀集

信濃追分

藤見佳楠子

飛び発ちを待つ鷺草の密と咲き
和宮の降嫁の道や虹淡き
夕焼の宿場に残る馬つなぎ
夕立に駆け込む茶屋の五平餅
窓洩るる信濃追分夜の秋
青林檎をさなに採らす肩車
立秋と思へぬけふの温度計

百日紅

山口キミコ

遠き日の日がな日直百日紅
花園てふ町に蓮の花育つ
単線の長き待機や花木権
ふたり居に夜干の梅の二・三十
異国より児のひとり旅夏休み
鉾立ちて京の賑はひいよ増し
祇園会の蘇民将来粽買ひ

竹床几

松岡 和子

午後三時雷ぐせのつきし峡
百年の上がり框の渋団扇
朝採りといふ重さあり熟れトマト
音速に優る光速遠花火
無心てふ涼しさのあり陶工房
麦刈りやゴッホの農夫めきし夫
峡おやぢ半跣思惟なる竹床几

上機嫌

巡る血の薄れゆくなり冷奴
大の字になれば急かせる法師蟬
無縁塚に群れる鬼百合そり返り
鷺草の今朝は開きて上機嫌
夏祭三尺帯の子が揃ひ
心揺れ夫の身案ず熱帯夜
予報士が酷暑を詫びる正午かな

日焼け

天体の終焉じみし劫暑かな
日焼して青年十指爪光る
一身上の都合向日葵枯れてをり
熱帯夜魚の形に眠りけり
初秋の口ついて出るワルツかな
いつまでを新婚といふ蔓荔枝
ひとの名を刻む余白や墓参り

宮崎左智子

冷し西瓜

石川かおり

射干の鉢植系の軒雨宿り
歳時記と籠城したる日の盛り
バナナ売声滔々と映画村
ちぎり絵の花火大輪夏見舞
金盞冷し西瓜の浮き沈み
車窓より水墨画めく夏の湖
早稲の田や駅弁膝に気まま旅

常田 希望

夜の秋

伊東 和子

卒寿の母と語る来し方湖涼し
ホテルの灯湖に鏤め夜の秋
薔薇の咲きホテル時間のモーニング
衣をたたむ母の習慣朝涼し
京の空囃子も高く鉦の月
あかときの森の定刻蟬時雨
額あぢさゐ「隅田花火」の名を知りぬ
(額紫陽花の一種)

コーラ呑む

鈴木 照子

マイナスイオン

橋本 靖子

日焼子のすらりと育ちコーラ呑む

壁に貼る「約束事」や夏休み

ポケットにワインの小瓶青葡萄

夏霧の立つや魚沼米処

登山客へ魚沼産の握飯

濃厚なミルクジェラード温泉宿の夜

山小屋の見えて一息滴れる

合歓の花吉野下から上へ抜け

上千本抜けて宮滝万葉路

蝸や南朝人の逢瀬径

滝壺やマイナスイオン身に浴びて

朝六時はや輪唱の蝉の声

打ち水を母の形見の下駄履いて

蝉しぐれ初の逢瀬の亡夫若き

風鈴

竹内 悦子

桔梗苑

秦 和子

風鈴の鳴るは陸奥^{みちのく}たましづめ (南部土産より)

榕樹^{がじゆまる}の纏るる根元部屋暑き

猛暑ゆゑ佛花萎えたる地藏尊

夏瘦せもせずに動ける我が身かな

わがために虹鱒の苞古稀の夫

低き鼻が卑下の根源河童の忌

鷺草や嬰の寝息の安らかに

たおやかに和の趣の桔梗苑

ぼんと咲く社の紋の桔梗かな (清明神社)

もてなしの薬草ジュース暑気払

一面の蓮池眩し楽天地

値上りの天上知らず鰻丼

喪の襟に汗にちませる切なき日 (義弟逝く二句)

夏蝉の鳴き尽くしたる忌明かな

雲海

空蟬を拾ひこっそり草叢へ
濡れ色の見紛ふばかり夏あざみ
夏蝶の乱舞に酔へる花の園
花園へハイカー導く夏あかね
雲海を従へし威や駒ヶ岳
修業僧の褪せし衣に夏の雨
バス停を目前に見て緑蔭へ

福本すみ子

夏霞早起きをして紀の伊勢路
浜木綿の砂浜今はひと気なく
合歓咲いて熊野古道の風やさし
海猫の我が物顔や夫婦岩
はまねこ浜朴の鮮やかな色ひと日花
台風の傷跡残る那智の滝
大旱太平洋の夕日燃え

夏霞

増田 一代

盆の唄

戒名をなぞりて兄の墓洗ふ
新盆に並ぶ顔ぶれ代替はり
ふるさとの球児活躍夏灼くる
忌に戻る故郷の駄盆の唄
盆用意メモを片手に町に出る
熱中症の注意呼びかけ広報車
鉢棚へもどす花鉢台風過

西田 史郎

川床遊び

松田 和子

山里の川床を満喫奥座敷
川風に襟元涼し雲ヶ畑
つややかな北山材の川床に坐し
頭よりがぶりと鮎の香ばしさ
童心に戻りしをんな川遊び
溪流の瀬音涼しや雲ヶ畑
治道の北山杉の涼意かな

星 祭

宮田 香

緑 蔭

飯田美千子

徹夜して再試レポト朝の蟬

草原の獅子の鬣風絶ゆる

波音の届く本堂朝涼し

アイロンをかける夢みる三尺寝

甲虫の寄り来る窓辺丸太小屋

メロン切る祖母はいつでも笑顔佳き

石畳の西国街道星祭

鉾町のしつらへみごと京町家

山鉾の大揺れに揺れ辻廻し

涼を呼ぶ洗い茶巾の水の音

水指しの葉蓋活かして夏点前

緑蔭に古今伝授のゆかりの碑
(長岡天満宮一句)

万緑や本殿までの五の鳥居

夜を徹し千日詣愛宕山

盆の月

森下 康子

礼文島

伊藤 純子

仲見世の賑はひ鬼灯市へ列

残されし者の勤めや魂迎

忍者めく香煙の中盆の寺

茄子牛に亡夫を託して見送りぬ

八日目の蟬の亡骸歩道橋

黄昏の銀座界限盆の月

お手本は長子の役目秋の雷

ここ礼文海霧に濡れつつ山路かな

萱草の黄の大波や海を前

宿の窓占むる雪溪利尻富士

明易や海猫鳴く声の絶ゆるなき

じゃがいもの花は紫海人の畑

放牧の黒牛はるか草いきれ

最北の鐵路尽きたる駅涼し

瑠璃集

大西日

阪本 哲弘

噴水の穂先が呼びし夜の雨
積ん読の日日続きけり大西日
白扇を開く商談成りてより
留学を終へしフライト雲の峰
球審を買って出でたり生身魂

(あの日の玉音放送を追憶)

涼み人

北尾 章郎

八尾の町

藤本 秀機

消印が価値白樺の夏見舞
八十路なれば機会逃さず避暑の旅
細り来る片蔭鉾の巡行路
鮎釣の肌焼くのみにをはりけり
鴨川や等間隔の涼み人

半夏生

山本 孝夫

草むしり

松田 洋子

蚊の来襲闇を零戦飛ぶ如く
隻眼の暮し危ふき半夏生 (白内障手術二句)
眼帯の取れて金魚の鮮やかに
七本槍交せし山や緑濃き (賤ヶ岳)
駅弁にて締める近江路夏の旅

夏の闇火の粉散らせる大松明
妖精の飛び出す予感蓮浮葉
青林檎丸かじりせむ月満ちて
日の昇るまでを一気に草むしり
水鉄砲本氣の父に本氣の子

紅玉集

ぐるぐるとながれるプールきもちいい
土井ここの
ゴロゴロピカカミナリこわくてでられません (小一)
あせだくでめいるのでぐちさがします (東京ミッドタウン)

しおれるよゴーヤカーテン暑すぎて
森下 千聖
打ち水に残り湯使ってエコ作戦 (小四)
クールダウン熱い体に冷そうめん

朝一番のプールは少し勇気いる
土井穂乃佳
ビル谷間スカイグライダー涼しくて (東京ミッドタウン) (小五)
夏休みボルタリングに初挑戦 (壁上りのこと)

朝早くはつきり見えるくもの巣が
廣瀬 将也
扇風機首振りしても姉のほう (小五)
夕立の向こうにみえる虹きれい
猛暑日の暑さ対さく水泳で

炎天をいこと一緒にかけまわる
「悪まの実」食べて暑さを吹き飛ばす
美味しいな冷やしたパインのど通る
パレードのドレス輝く夏の夜
水しぶき急流滑り涼しいな

塩路 彩奈

(小一)

バスケット軽めの熱中症になる
鈴木 香奈
ばんぱーん花火と笑顔はじけとぶ (中一)
母さんのかんざし借りて浴衣姿
試合中目に汗入れてシュートうつ
毎日がバスケット勉強そっちのけ
思い出の花火は貼り絵色が散る

鈴木 香奈

(中一)

夏の晚九人一族出発だ (USJ)
塩路 遼
ペットボトル三本背負い汗いっぱい (中二)
午前七時開門待てば赤とんぼ
キラクター皆で出迎え暑を忘れ
風涼し海賊弁当昼ごはん

塩路 遼

(中二)

セミの声ラジオの声と競い合う
廣瀬 結麻
朝早く打ち水しても効果なし (中二)
晴れ一転ゲリラ驟雨でずぶ濡れに

廣瀬 結麻

(中二)

十月号月評

塩路 隆子

遠き日のひがな日直百日紅

山口キミコ

作者の第一句集「九十九島」にありますように、長年勤め上げられた教師生活の、恐らく新任の頃を懐古されたの一句であろう。いまは警備員などが配置され、日直も一人であるとは思えないが、当時は何時も子供らの声が漲っている校舎が休日ともなれば、静まり返っている。人っ子一人いない校舎での日直の一日は長い。「ひがな一日」と言う言葉のとおり「ひがな日直」の言葉が、退屈するくらい長い一日を思わせる。また季語の「百日紅」がそれを助け効果をあげている。よい作品である。

窓洩るる信濃追分夜の秋

藤見佳楠子

作者はよくご家族と旅をされる。信州へ旅をされた一場面を句にされた。追分から説明をすると、本街道から枝線街道への分岐点を言う。長野県東部の北佐久郡軽井沢あたりに起こる民謡を信濃追分と言っておられるのである。沢山あるなかでよく知られているのは「小諸出てみりや浅間のやまによー今朝も煙が三筋たつ」窓から洩れる哀愁を帯びた民謡を本場で聞かれたの思いは如何ばかりであったか。「夜の秋」の季語がしっかりとそれを支えている。樟蹊子より基礎を学ばれた作者のゆるぎ

のない作品である。

午後三時雷ぐせのつきし峡

松岡 和子

お住まいの甲賀の峡を詠われると右へ出る者のない作者である。この句の面白さは矢張り「雷ぐせ」である。雨の少ない極暑・猛暑の名の通りの昨今であるが、羨ましい限り。午後三時ごろになると、この所必ず雷が鳴り始め騒雨がやつて来るといふ。それを「雷ぐせのつきし峡」と言われる作者を褒めたい。感性の良い作品である。

予報士が酷暑を詫びる正午かな

宮崎左智子

今年の暑さは格別、だからこんな句も生まれるのである。何時もユーモアとウィットに富んだ句を披露されている作者である。この号からまたエッセイを復活していただいている。日本列島は雨を待っているのに、晴マークばかりの天気予報をする予報士さんが「ごめんなさい」と謝りつつ放送をしているとは…。予報士のせいでもないのにお気の毒、つい口を込めて本音が出たのであろう。把握が面白い作品である。

(以下略)